

第4部 関連器物からみた事故

日常生活の中では、エスカレーターで転んだり、遊具から落ちたり、日々使用する様々なもの（器物）により事故に遭うことが多くあります。

ここでは、これまでに多くの事故が発生している器物について事故の傾向をまとめました。また、使い方によっては思いがけない危険が潜んでいる器物についても取り上げました。

1 エスカレーター

エスカレーターは、駅やショッピングセンター等、多くの場所で利用されています。エスカレーターに乗っていてバランスを崩して転んだり、小さな子供が靴を挟まれたりする事故が発生しています。

(1) 年別搬送人員

平成26年から平成30年の5年間で、6,975人が救急搬送されています。

平成30年中は1,359人が救急搬送されており、65歳以上の高齢者が全体の6割以上を占めています（図4-1）。

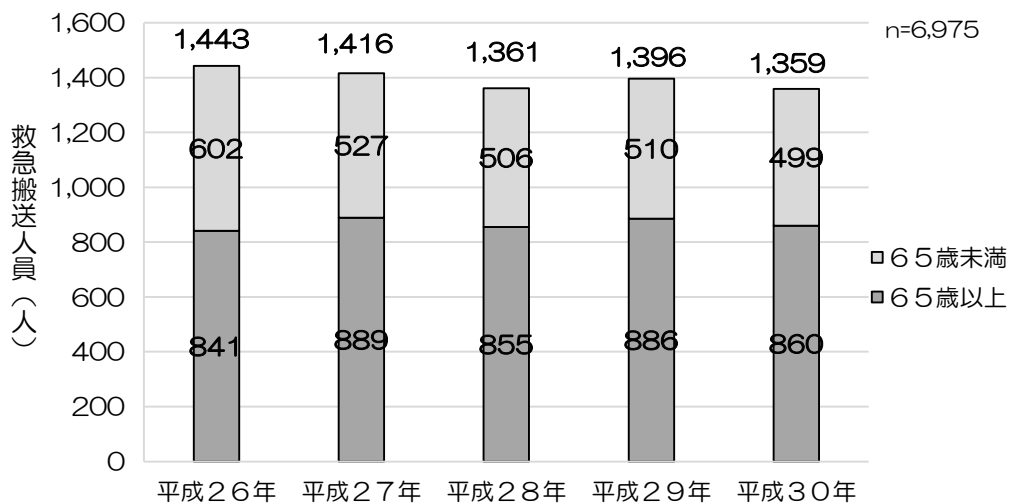


図4-1 年別救急搬送人員

(2) 年齢層別搬送人員

年齢層（5歳単位）別にみると、65歳から89歳までの各年齢層で100人以上が救急搬送されています（図4-2）。

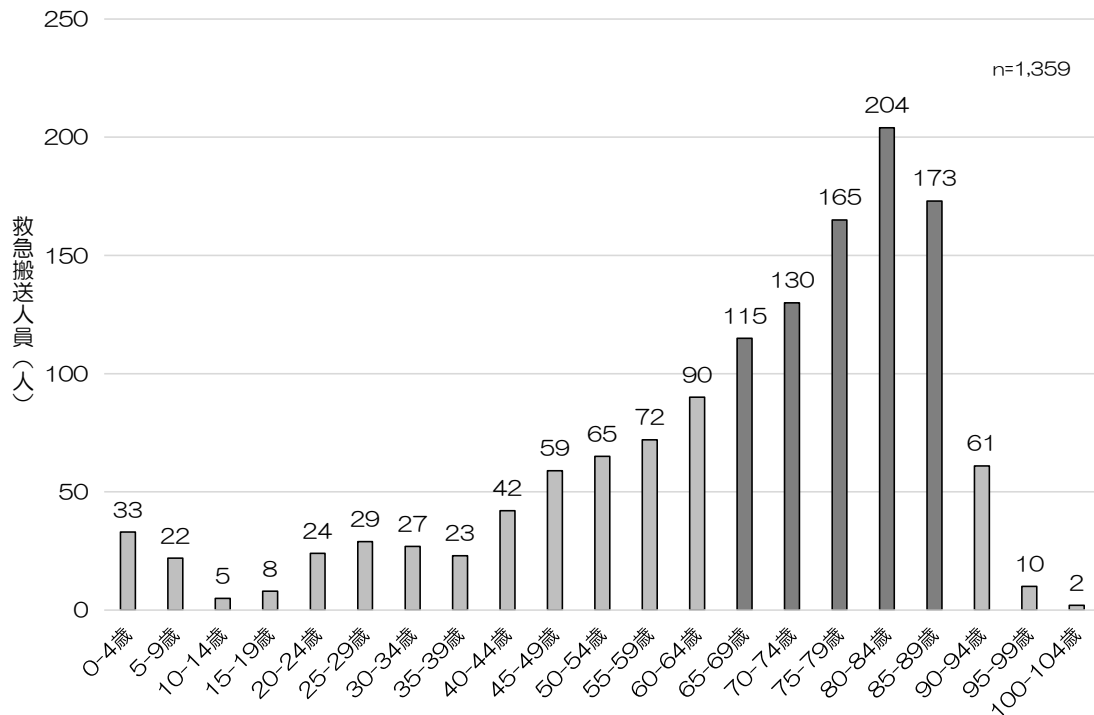


図4-2 年齢層別救急搬送人員

(3) 時間帯別搬送人員

高齢者と高齢者以外（64歳以下）の時間帯別救急搬送人員をみると、高齢者では10時台から16時台に多く発生しています。また64歳以下では、16時台以降に増加し、23時台が最も多くなっています（図4-3）。

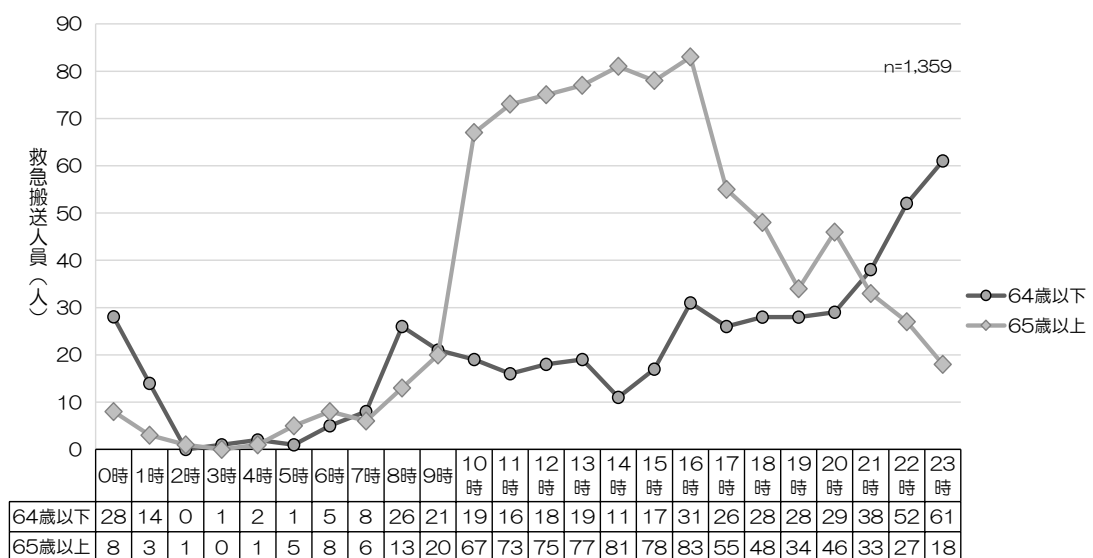


図4-3 時間帯別救急搬送人員

(4) 事故種別ごとの搬送人員

エスカレーターでの事故を事故種別ごとにもみると、「ころぶ」事故、「落ちる」事故が9割以上を占めています（図4-4）。

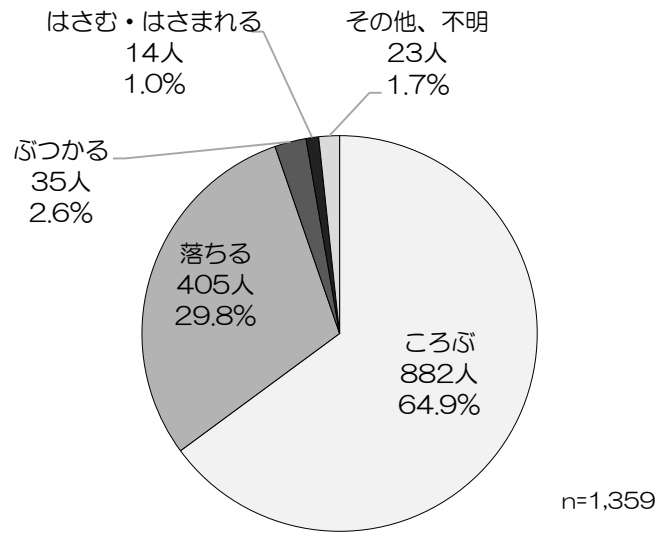


図 4-4 事故種別ごとの救急搬送人員

(5) 初診時程度別搬送人員

エスカレーターで受傷して救急搬送された人の約2割は中等症以上と診断されています（図4-5）。

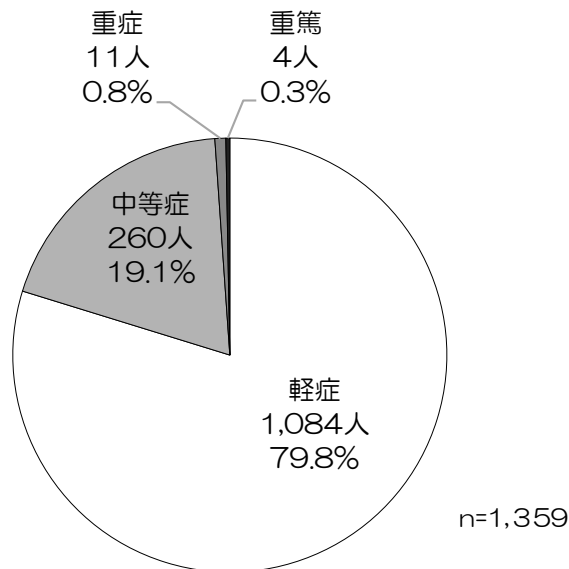


図 4-5 初診時程度別救急搬送人員

(6) 発生場所別搬送人員

事故発生場所でみると、駅などの道路・交通施設で最も多く発生していますが、高齢者では店舗・遊技施設等が4割を占めています（図4-6、図4-7）。

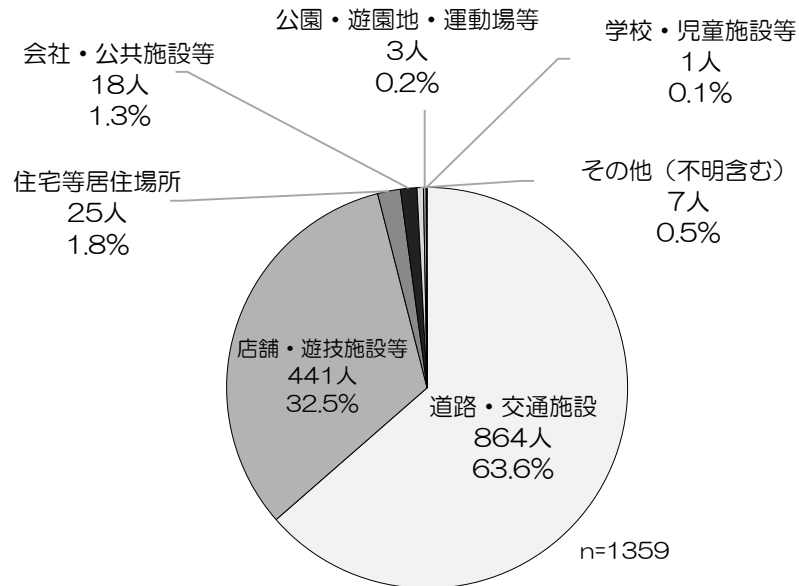


図4-6 発生場所別救急搬送人員

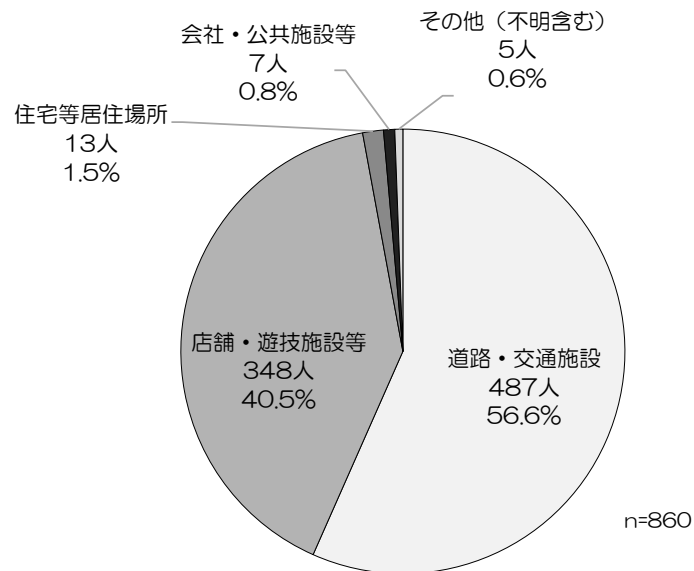


図4-7 発生場所別救急搬送人員（高齢者）

(7) エスカレーターでの事故事例

【事例1 飲酒後に転落】

飲酒後、下りエスカレーターに乗っている際、誤って約5段の高さから転落して顔面を受傷した。(50代 中等症)

【事例2 サンダルがはさまれる】

エスカレーターで地下1階へ下っていたところ最終段で、履いていたゴム製のサンダルが挟まり足の指を受傷した。(8歳 中等症)

【事例3 指が挟まれる】

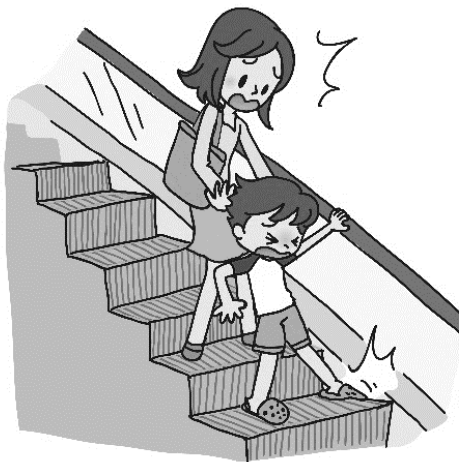
店舗内で買い物中、1階から2階へ上がるエスカレーター最上段部の手すり巻き込み部に指が挟まれ、抜けなくなった。(5歳 中等症)

【事例4 人が倒れてきて転落】

上りエスカレーターに乗っていたところ、前方の方がバランスを崩し、それらに巻き込まれ後方へ転倒し受傷した。(60代 軽症)

【エスカレーターでの事故防止】

- 手すりにつかまりましょう。
- 飲酒後の事故が多く発生しているため十分に注意しましょう。
- エスカレーター上の歩行は、バランスを崩しやすく、他の利用者と接触するおそれがあります。ステップに立ち止って利用しましょう。
- 靴の挟まれ等を防止するため、ステップの黄色い線の内側に立ちましょう。
- 買い物カート等を乗り入れると、バランスを崩すおそれがあるため、注意しましょう。
- 子供がエスカレーター近くで遊ばないように注意しましょう。



2 エレベーター

エレベーターは、共同住宅やビル、店舗等、あらゆる場所で利用されています。エレベーターの乗降時に転んだり、小さな子供が手や指をはさまれたりする事故が発生しています。

(1) 年別搬送人員

平成26年から平成30年の5年間で778人が救急搬送されています。平成30年中は150人が救急搬送されています（図4-8）。

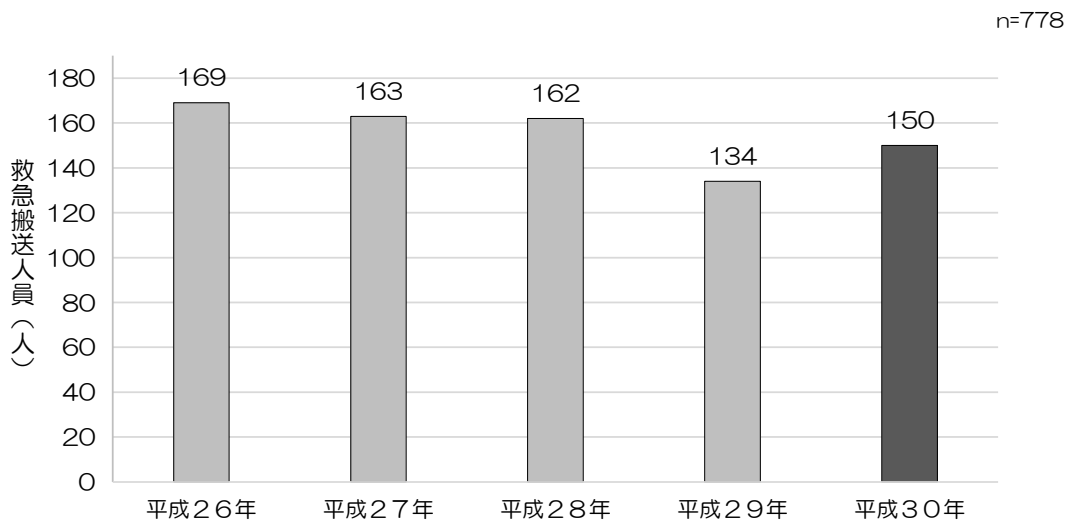


図4-8 年別救急搬送人員

(2) 年齢層別搬送人員

年齢層（5歳単位）別にみると、0歳から4歳が36人と最も多くなっています（図4-9）。

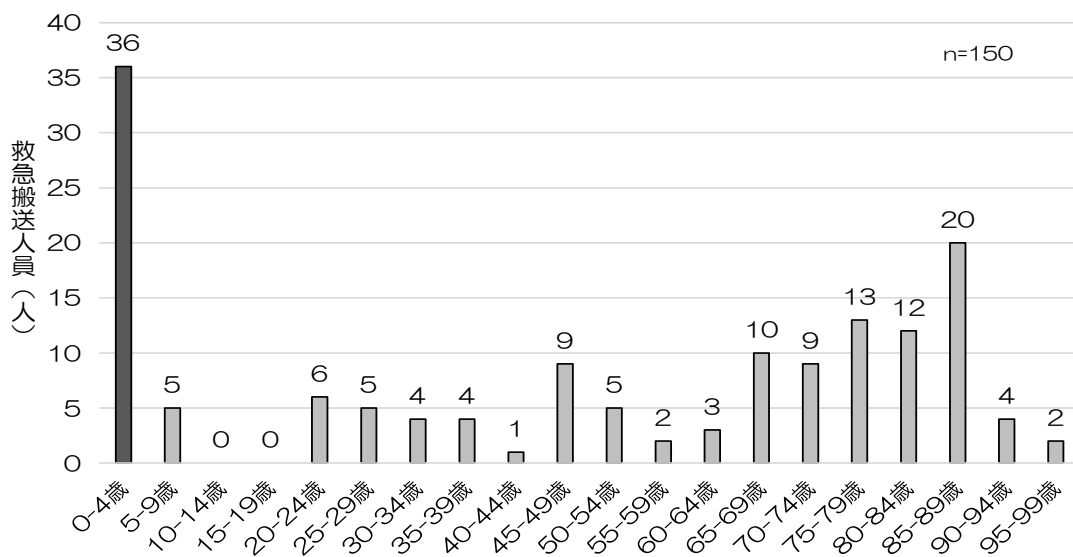


図4-9 年齢層別救急搬送人員

(3) 時間帯別搬送人員

時間帯別救急搬送人員をみると、14時台が18人と最も多く、全般的に日中の時間帯が多くなっています(図4-10)。

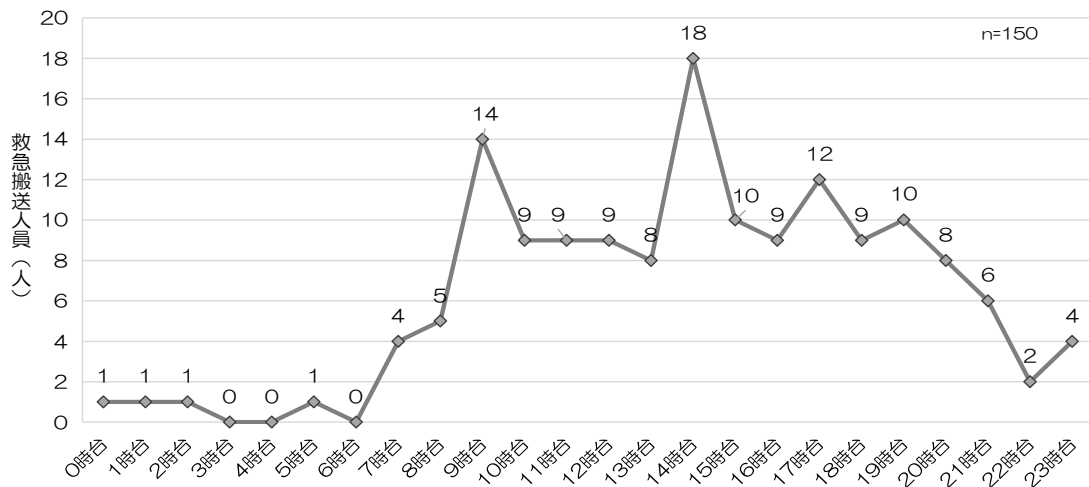


図4-10 時間帯別救急搬送人員

(4) 事故種別ごとの搬送人員

エレベーターでの事故を事故種別ごとにみると、約5割がころんで受傷しています。また、手や指等が扉や戸袋にはさまれたりして受傷する事故も多く発生しています(図4-11)。

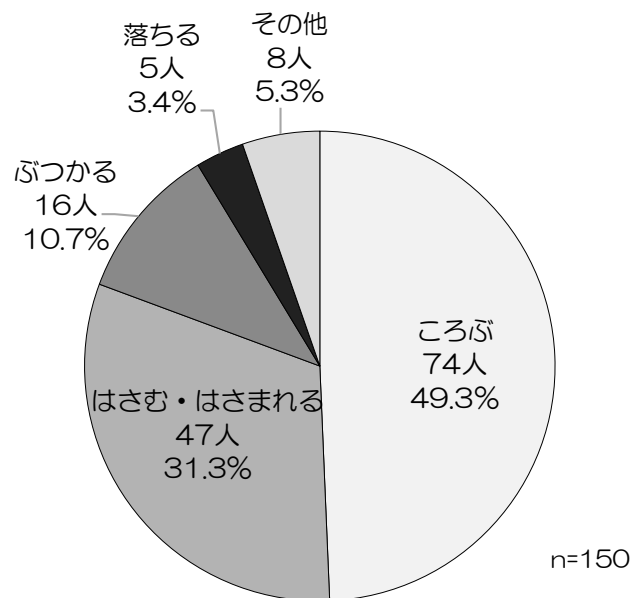


図4-11 事故種別ごとの救急搬送人員

(5) 初診時程度別搬送人員

エレベーターでの事故で救急搬送された人の3割以上は、入院の必要があるとされる中等症以上と診断されています（図4-12）。

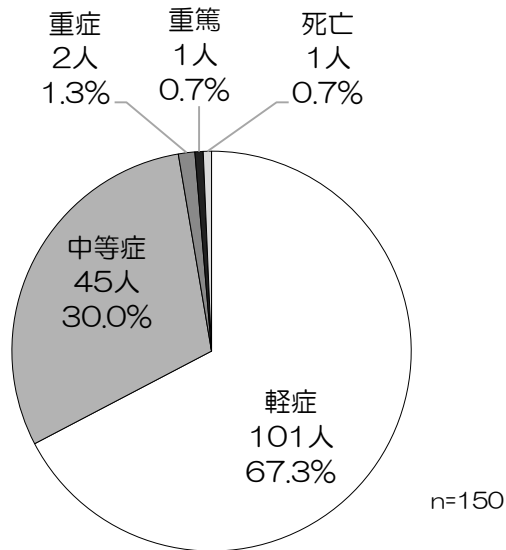


図4-12 初診時程度別救急搬送人員

(6) 発生場所別搬送人員

事故発生場所で見ると、住宅等居住場所や店舗・遊技施設等、道路・交通施設で多く発生しており、8割がこの3つの場所で発生しています（図4-13）。

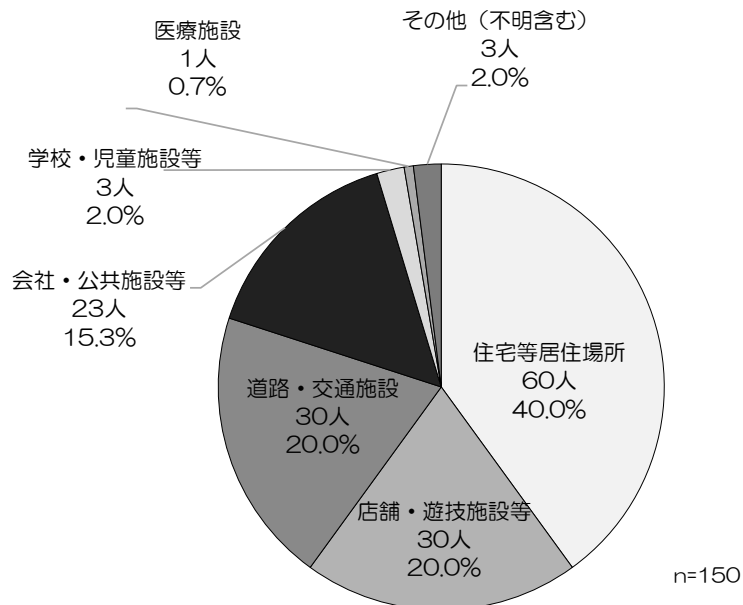


図4-13 発生場所別救急搬送人員

(7) 0歳～5歳のエレベーターによる事故の内訳

0歳から5歳のエレベーターによる事故は、36人中32人が「はさむ・はさまれる」事故となっており、手や指等を挟まれる事故が多くなっています（表9）。

表9 0～5歳のエレベーターによる事故の内訳

| | はさむ・はさまれる | | ぶつかる | 総計 |
|----|-----------|----|------|----|
| | 戸袋 | 扉 | | |
| 0歳 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 1歳 | 10 | 4 | 2 | 16 |
| 2歳 | 7 | 4 | 2 | 13 |
| 3歳 | 1 | 4 | 0 | 5 |
| 4歳 | 2 | 0 | 0 | 2 |
| 5歳 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 小計 | 20 | 12 | 4 | 36 |
| 総計 | 32 | | | |

(8) エレベーターでの事故事例

【事例1 戸袋にはさまれる】

子どもを抱っこした親がエレベーターに寄りかかった状態であり、エレベーターのドアが開いた際に子どもの手の指がエレベーターの戸袋にはさまれた。（2歳 軽症）

【事例2 ドアにぶつかる】

マンションでエレベーターに乗ろうとした際、閉まりかけた扉に体がぶつかり転倒した。（70代 中等症）

【エレベーターでの事故防止】

- 乗降時は床との段差に注意し、駆け込みなど無理な乗降はやめましょう。
- ドアの開閉時にはドアに触れず、荷物や衣服などが巻き込まれないように注意しましょう。また、子供はドアから離れた位置にさせましょう。
- エレベーターを使った作業時の事故は、重症事故につながることを認識し、作業手順、制限重量などに十分注意しましょう。

3 自転車の幼児用座席

保護者が自転車の幼児用座席に子供を乗せていて転倒したり、子供だけを残して自転車を離れ、自転車が倒れるなどして乳幼児が受傷する事故が多く発生しています。

(1) 年別搬送人員

自転車の幼児用座席から転落するなどして平成26年から平成30年の5年間に1,080人の乳幼児(0歳から5歳)が救急搬送されています。平成30年中は236人が救急搬送されています(図4-14)。

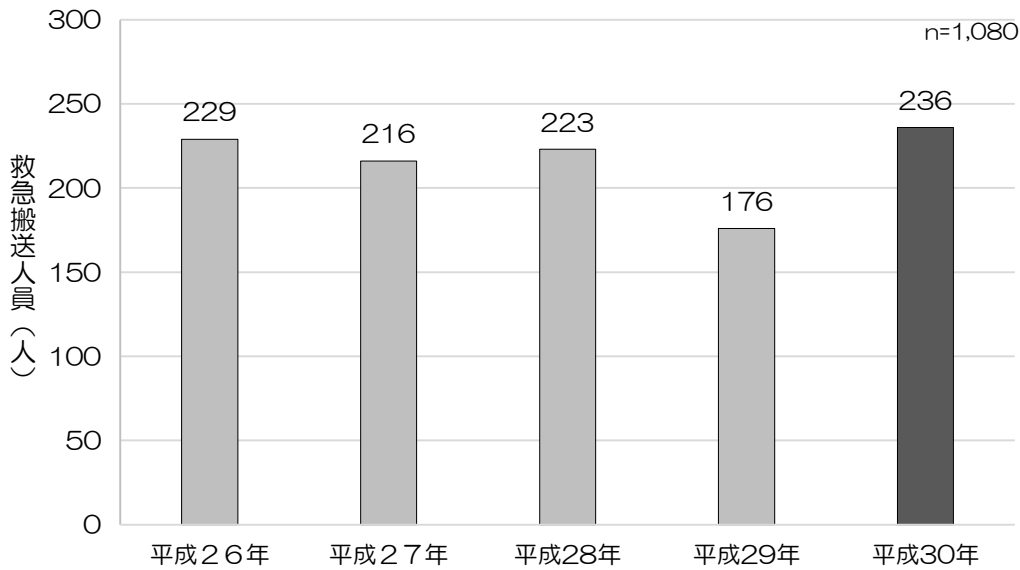


図4-14 年別救急搬送人員

(2) 年齢別搬送人員

年齢別では、2歳児、3歳児の事故が多く発生しています(図4-15)。

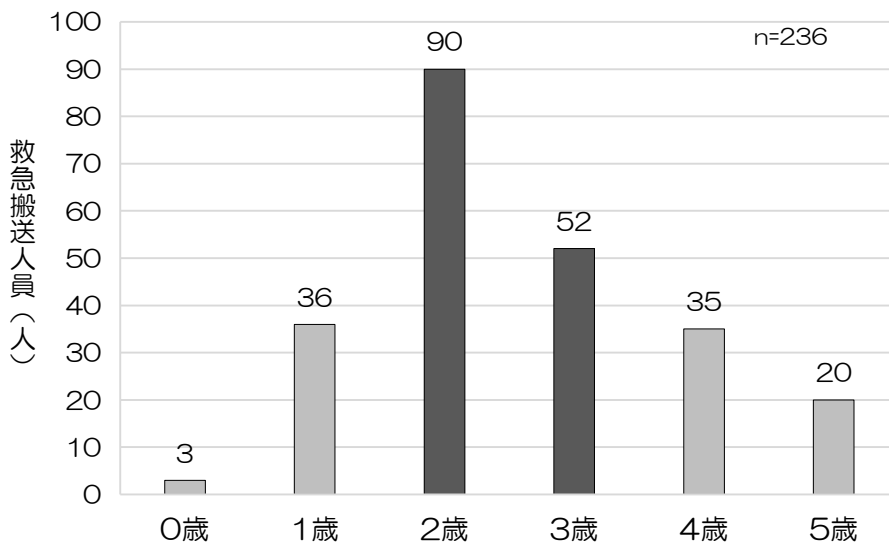


図4-15 年齢別救急搬送人員

(3) 初診時程度別搬送人員

初診時程度では、軽症が9割以上となっています（図4-16）。

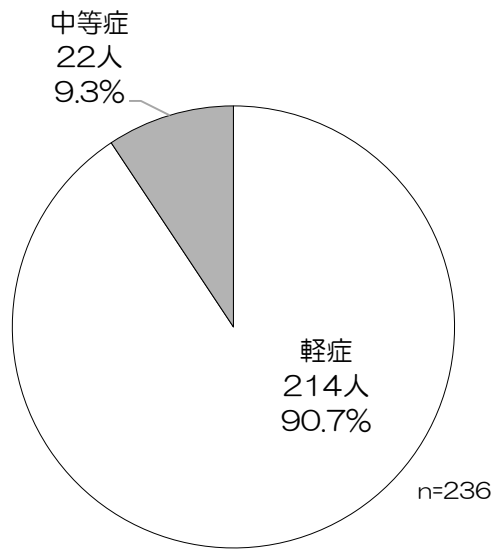


図4-16 初診時程度別救急搬送人員

(4) 受傷部位別搬送人員

受傷部位別に分類すると、全体の約8割が顔や頭を受傷しています。また、足や腕を骨折する事故も発生しています（図4-17）。

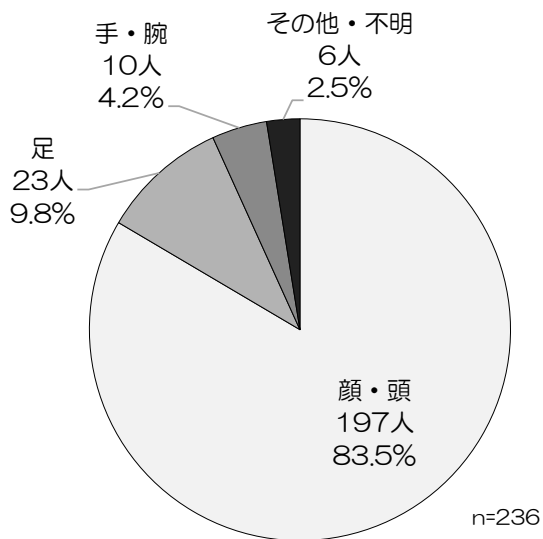


図4-17 受傷部位別救急搬送人員

(5) 自転車の幼児用座席での事故事例

【事例1 バランスを崩す】

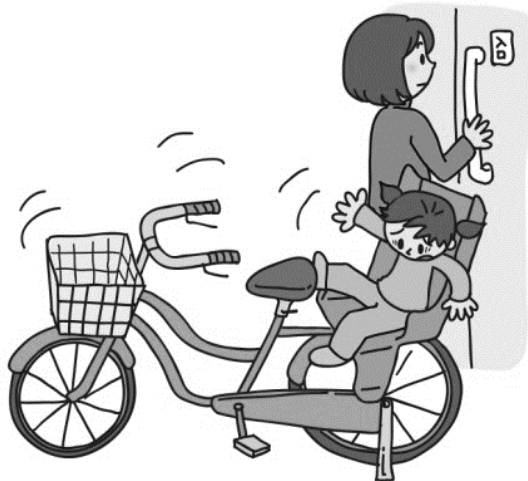
親が運転する自転車の補助イスに乗っており、親が一時的に降車し、スタンドをかけていたところ、バランスを崩して転倒し頭部を受傷した。(4歳 中等症)

【事例2 風にあおられる】

親が運転する自転車の補助イスに乗車中、停車中に風にあおられて自転車ごと転倒し、肘部を受傷した。(4歳 中等症)

【自転車の幼児用座席での事故防止】

- 子供を自転車の幼児用座席に乗せたまま自転車から離れないようにしましょう。
 - ヘルメットは、頭部への衝撃を緩和するのに有効であるため、ヘルメットを着用させてから自転車に乗せましょう。
 - 転落防止のため、備え付けのベルトを締めましょう。
 - 自転車走行中以外にも事故が発生することを意識しましょう。
 - ルールとマナーを守った運転を心がけましょう。
- ※ 平成25年7月1日に「東京都自転車の安全で適正な利用の促進に関する条例」が施行されました。



4 遊 具

(1) 年別搬送人員

遊具による事故で、平成26年から平成30年の5年間に4,365人の子供（12歳以下）が救急搬送されています。平成30年中は902人が救急搬送されています（図4-18）。

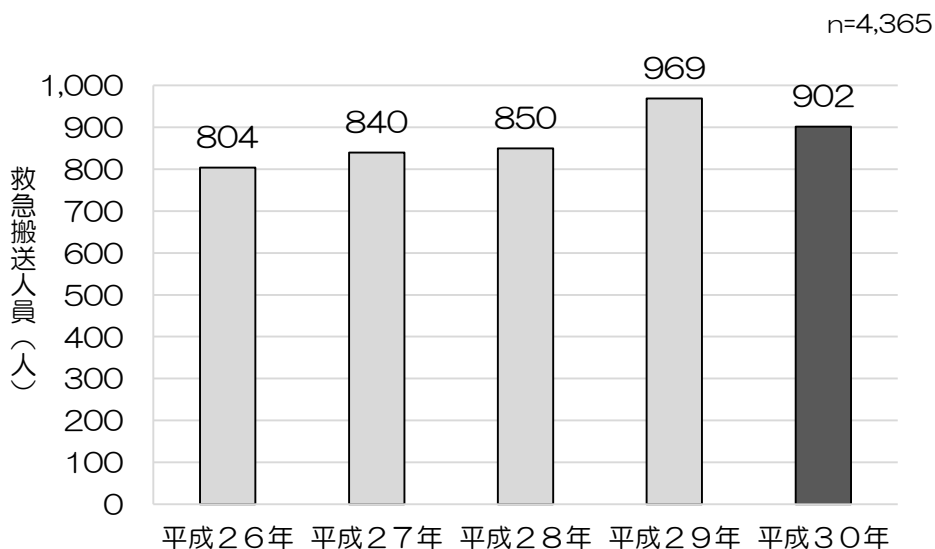


図4-18 年別救急搬送人員

(2) 年齢別搬送人員

年齢別では、4歳が最も多く、98人が救急搬送され、次いで、2歳と7歳が97人となっています（図4-19）。

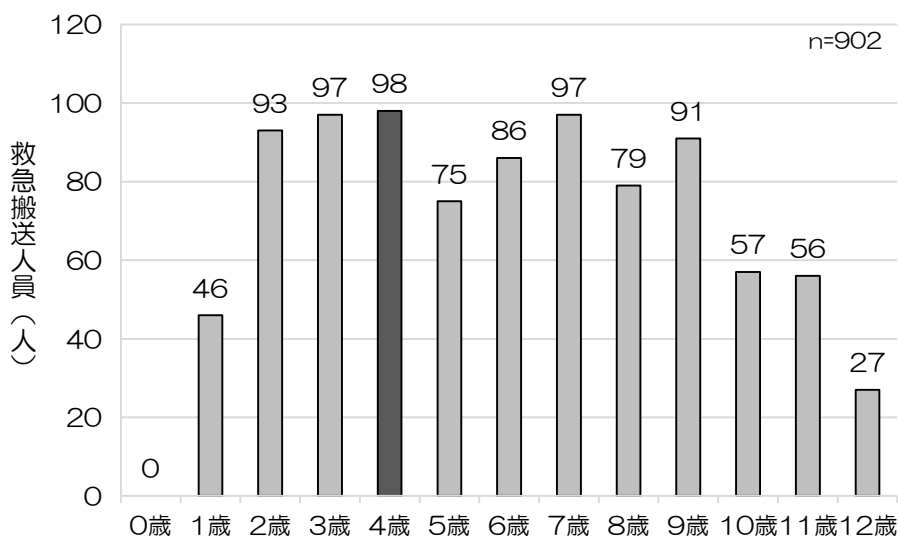


図4-19 年齢別救急搬送人員

(3) 月別搬送人員

月別では、4月が最も多く、120人が救急搬送されています。次いで5月に106人の子供が救急搬送されています（図4-20）。

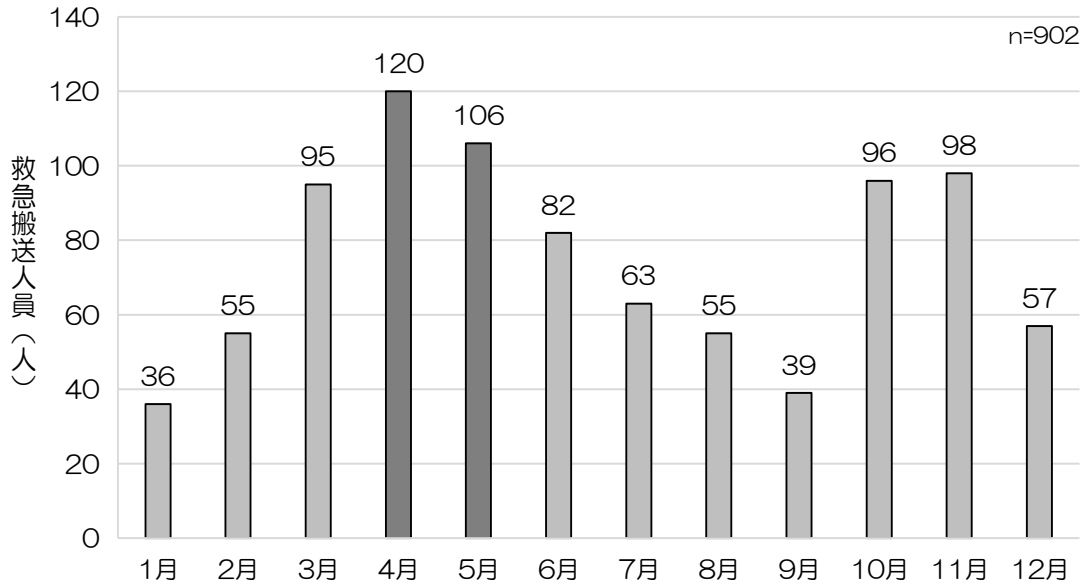
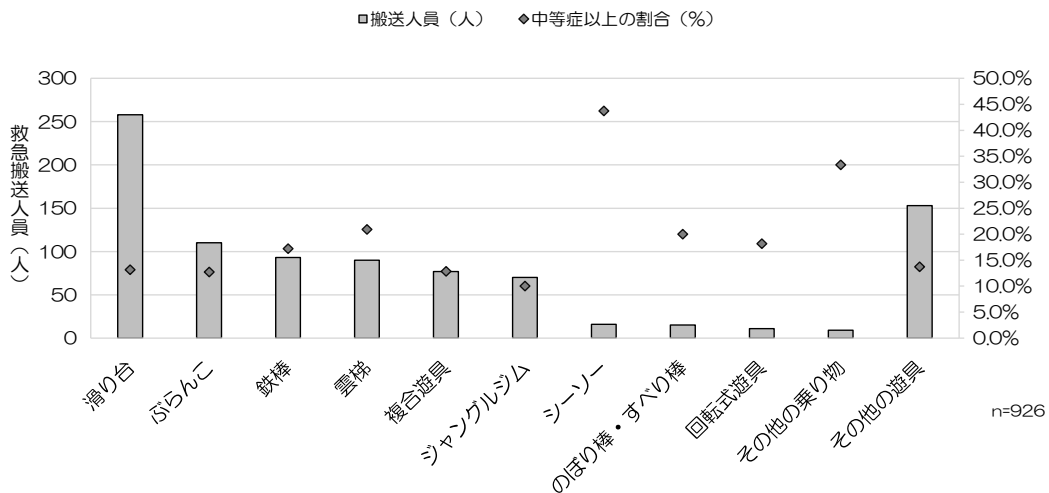


図4-20 月別救急搬送人員

(4) 遊具別の搬送人員と中等症以上の割合

遊具別にみると滑り台での事故が最も多く発生しています。また、シーソー、その他の乗り物事故では中等症以上の割合が3割以上と最も高く、雲梯やのぼり棒・滑り棒では中等症以上の割合が2割以上となっています（図4-21）。



| 遊具 | 滑り台 | ぶらんこ | 鉄棒 | 雲梯 | 複合遊具 | ジャングルジム | シーソー | のぼり棒・すべり棒 | 回転式遊具 | その他の乗り物(アトラクション) | その他の遊具 |
|----------|-------|-------|-------|-------|-------|---------|-------|-----------|-------|------------------|--------|
| 救急搬送人員 | 258人 | 110人 | 93人 | 90人 | 77人 | 70人 | 16人 | 15人 | 11人 | 9人 | 153人 |
| 中等症以上の割合 | 13.2% | 12.7% | 17.2% | 20.9% | 12.9% | 10.0% | 43.8% | 20.0% | 18.2% | 33.3% | 13.7% |

図4-21 遊具別の救急搬送人員と中等症以上の割合

(5) 遊具での事故事例

【事例1 滑り台】

公園内において、友人と鬼ごっこをしていて、高さ約 1.5m の滑り台から地面へ飛び降りたところ手首を受傷した。(9歳 中等症)

【事例2 のぼり棒】

幼稚園の園庭にある登り棒(高さ約2m)に足をかけて遊んでいたところ、誤って落下し受傷した。(6歳 中等症)

【事例3 鉄棒】

小学校の授業中、鉄棒にぶら下がっていた際に、友達に押されて地面に落下し腕を受傷した(7歳 中等症)

【事例4 ブランコ】

公園内でブランコをこいでいる小学生と衝突して転倒し、頭部を受傷した。
(4歳 中等症)

5 ガスによる事故

(1) 年別発生件数

ガスによる事故（火災、不救護を除く）は、平成26年から平成30年の5年間に240件発生しています。平成30年中は49件発生しています（図4-22）。

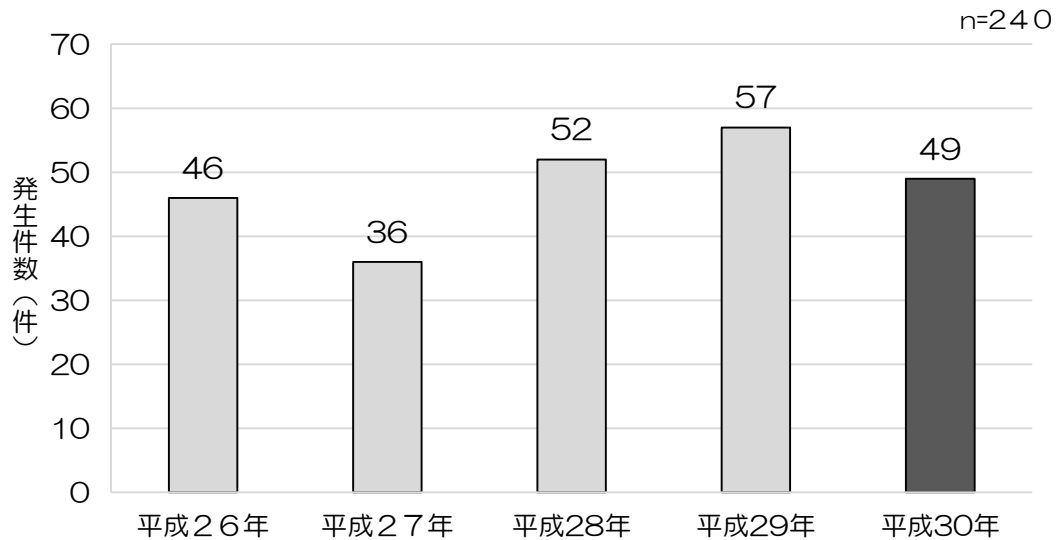


図4-22 年別発生件数

(2) 月別発生件数

月別では、7月が8件と最も多く、次いで、2月、10月、12月が7件となっています（図4-23）。

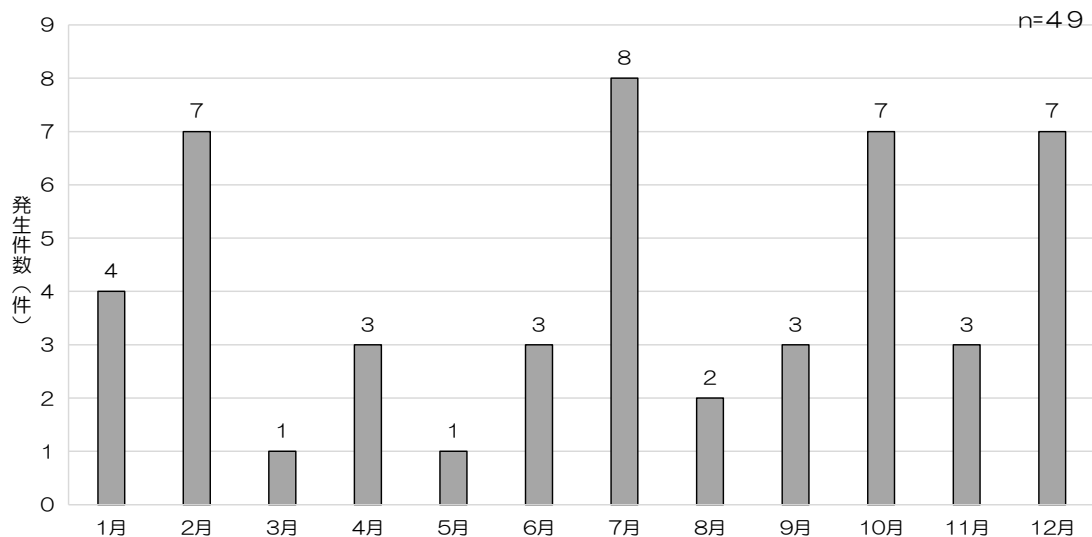


図4-23 月別発生件数

(3) 年齢層別搬送人員

平成30年中にガスに関連する事故（火災、自損、不救護を除く）により、75人が救急搬送されています。年齢層（5歳単位）別にみると、30-34歳が13人と最も多く、次いで40-44歳が8人となっています（図4-24）。

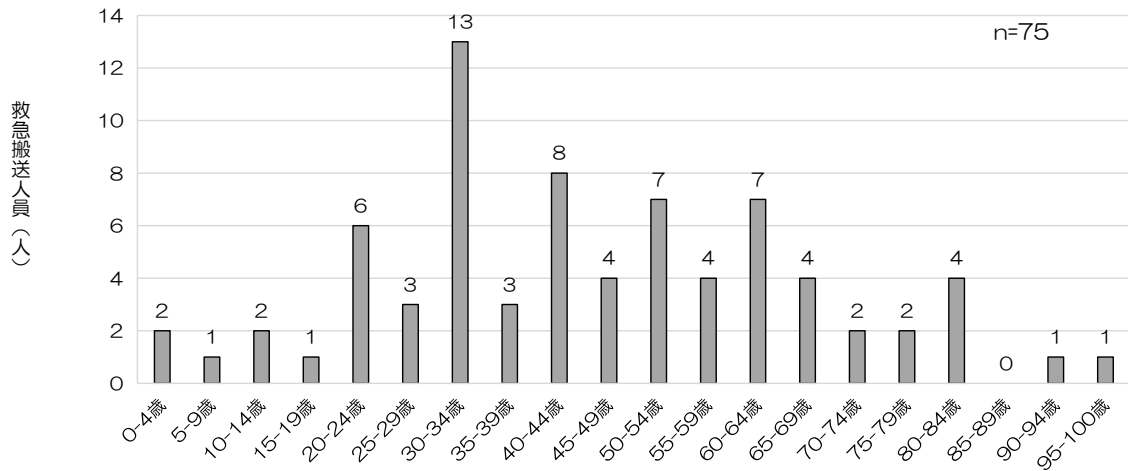


図4-24 年齢層別救急搬送人員

(4) 発生場所別発生件数

事故発生場所で見ると、6割以上が住宅等居住場所で発生しています（図4-25）。

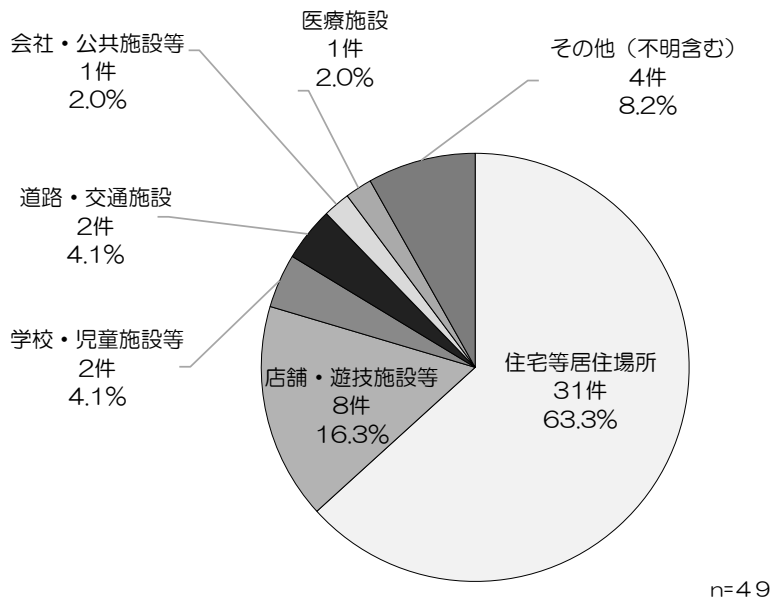


図4-25 発生場所別発生件数

(5) 初診時程度別と原因別搬送人員

ガスに関連する事故で搬送された人の5割以上が、入院の必要があるとされる中等症以上と診断され、生命の危険が強いとされる重症以上も約2割を占めています。(図4-26)。

原因別にみると一酸化炭素中毒による搬送が最も多く約5割を占めており、次いでエアゾール缶のガスへの引火となっています(図4-27)。

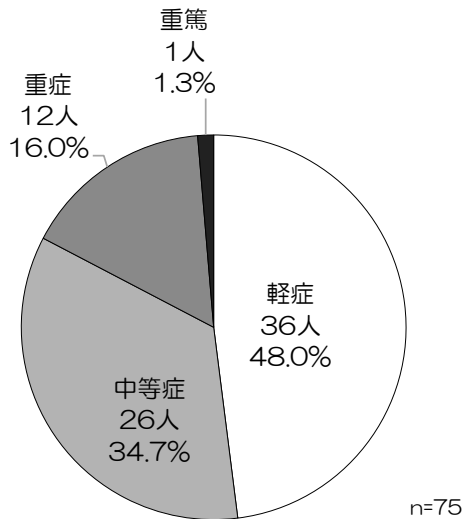


図4-26 初診時程度別救急搬送人員

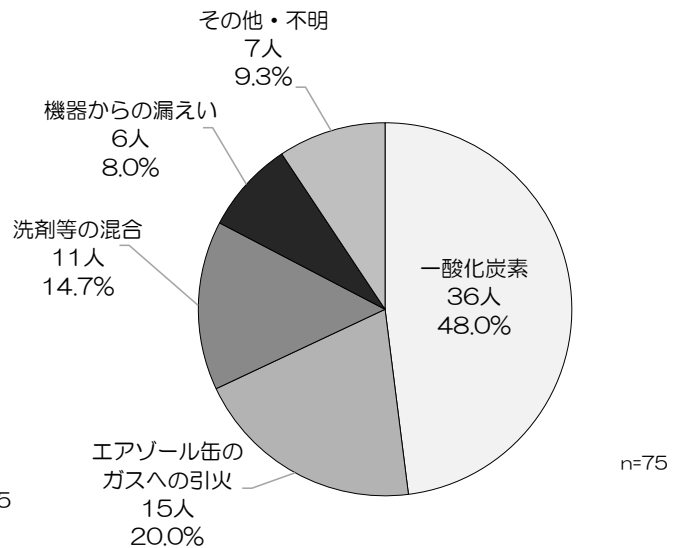


図4-27 原因別救急搬送人員

(6) ガス種別ごとの発生件数

ガス種別ごとにみると、一酸化炭素中毒が16件と最も多くなっています(図4-28)。一酸化炭素による事故のうち炭(火鉢・七輪等)と機械を使用した事故が、6割となっています。

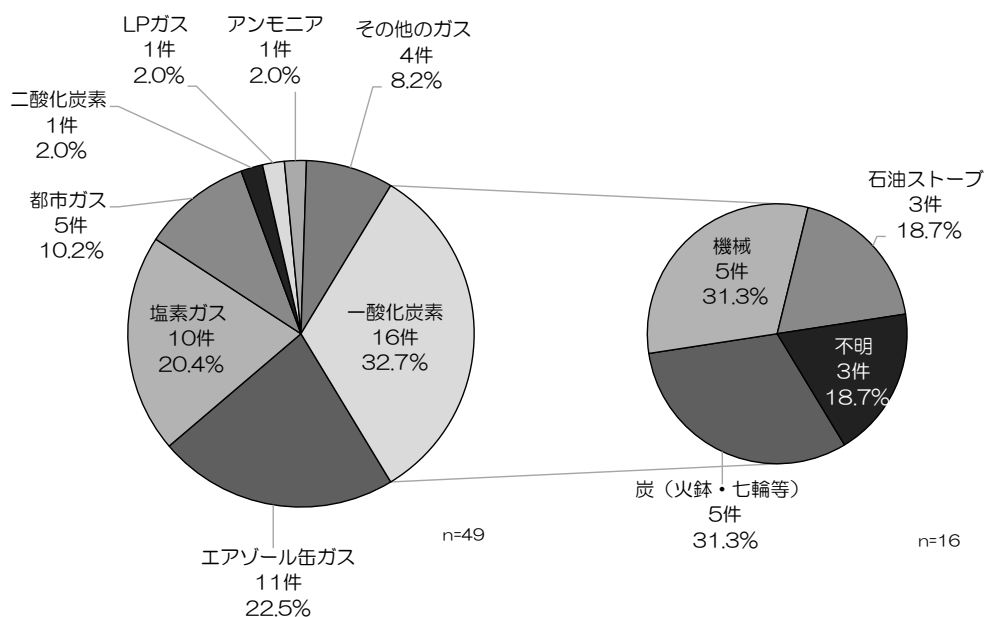


図4-28 ガス種別ごとの発生件数

(7) 一酸化炭素中毒による初診時程度別搬送人員

一酸化炭素中毒による事故で救急搬送された人の7割以上が、入院の必要があるとされる中等症以上と診断されており、生命の危険が強いとされる重症以上も、全体の約3割以上を占めています（図4-29）。

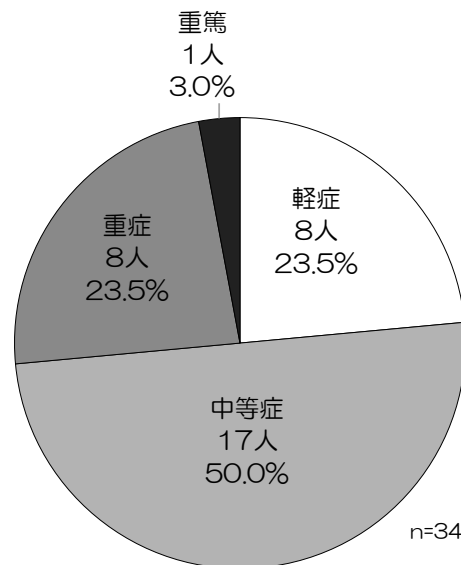


図4-29 初診時程度別救急搬送人員（一酸化炭素）

(8) ガスに関連する事故事例

【事例1 一酸化炭素中毒】

自宅で暖をとるために七輪で練炭を使用していたが、寝入ってしまい目覚めたときに気分が悪く、様子を見ていたが改善しなかった。（70代 中等症）

【一酸化炭素での事故防止】

- 十分な換気により、室内の一酸化炭素濃度が下がることから、火気設備・器具を使用の際は換気扇の使用や定期的に窓等を開けるなどして換気を十分に行いましょう。また、使用中に少しでも異常を感じたら、使用を中止するとともに十分な換気を行いましょう。
- 不完全燃焼が起こると一酸化炭素が発生することから、火気設備・器具の定期的な点検と清掃を行いましょう。
- 発動発電機やバーベキュー用コンロなど屋外での使用が想定されている火気器具等は屋内では使用せず、火気設備・器具の使用法を守りましょう。
- 一酸化炭素は、無色・無臭で気が付きにくい気体です。一酸化炭素を感知する警報器を設置することも有効です。

【事例2 スプレー缶のガス抜き】

傷病者はガスコンロで調理中に、付近でスプレー缶を廃棄処分するために穴をあけていたところ、その際に噴出したガスに引火し、顔面が炎にあおられ受傷したもの。

(50代 軽症)

【穴あけ・ガス抜きでの事故防止】

- 廃棄する場合は、必ず中身を使い切り、各区市町村が指定するごみの分別を守って捨てましょう。
- 厨房器具や暖房器具付近の高温となる場所や、直射日光と湿気を避けて保管し、厨房器具や暖房器具等の付近では使用しないようにしましょう。
LPGなどの可燃性ガスは噴射剤として使われていることが多いので、使用前には必ず製品に記載されている注意書きを確認しましょう。

【事例3 洗剤の混合使用】

浴室を掃除するために二種類の洗剤を混合したところ塩素ガスが発生し、誤って吸い込んだもの。(30代 重症)

【洗剤での事故防止】

- 種類の違う洗剤を一緒に使わないようにしましょう。
塩素系洗剤と酸性洗剤を一緒に使うと、有毒なガスが発生することがあります。
- 洗剤を別の容器に移し替えることはやめましょう。
アルミ缶など金属製の容器は、洗剤と容器が化学反応を起こし容器が破裂することや解けることがあります。
- 使う前に容器に書かれている注意事項を確認しましょう。



